

第六章 副作用

外から帰ってきたわたしを門番さんが呼び止めた。預かっていた小包を渡してくれたあと、わたしの具合はどうかと尋ねる。彼女自身は50歳代だろう、1年ちょっと前に旦那さんをはがんで亡くしている。わたしたちが引っ越してきた4年前にはすでに、旦那さんは咽頭だか甲状腺だかのがんの手術を終えたあとで、旦那さんに代わって彼女が門番を勤めていた。

葬式が終わったあとで知ったわたしは、驚いて悔やみに行った。といってもここで金を包んだり仏壇を拜んだりする習慣はないから、もう門番の仕事を再開していた彼女のところに立ち寄って、まことにこのたびは……と言っただけである。ありがとう、と言いながら彼女の目には涙が新しく浮かんできていた。

去年わたしが化学療法で具合が悪いく所、夫と腕を組んで、おそろしくゆっくりと歩いて市場に行くのを見て、どうしたの、ころんだのか、と尋ねられた。ううん、乳がんでね、頭もハゲちゃって、ほら、と帽子をもち上げてあっけらかんと告げていたから、彼女はわたしのことは承知している。12月、ほとんど外出できなかったときには、このごろ見かけないけど、どうしてるの、と電話がかかってきたこともある。気づかいが嬉しかった。シルヴィアもそうだが、身内にがん患者がいると、仲間意識と連帯感が生まれる。

「今のわたしは手術をひかえていて、体調はいいのよ、あなたは？」と尋ねかえすと、

「わたしはいまだに亭主が死んだのが辛くて」

「まあ、そう。わたしの母も去年亡くなって、父はいまだにしょっちゅう泣いてるみたい。でもそれはそれだけいい伴侶であったということだから、ある意味では幸せなことだと思うわ」

「わたしは幸せじゃない。悲しくてたまらない。ほかの年寄りを見ると、どうしてあのひとたちは生きているのに、わたしの亭主は逝（い）ってしまったのだろうかと思うの。すべては神様のおぼしめしなのだけどね」

神様のおぼしめし。

イタリア語では神の意思だと言う。わたしは特に神を信じているわけではないけれども、わたしの人生がわたしの自由にならない、という意味では同じである。

運命がわたしの手にはない。

今まで、自分の人生は自分で切り開くものだ信じ、欲しいものには手をグイと伸ばして握り取ってきたわたしにとって、人生の根本である生き死にが思いどおりにならないとは皮肉なことである。

しかし、これだけはどうにもならない。

多少の再発予防手段があるだけだ。

夫が禁煙してくれ、と言ったときにはうんと言わなかったわたしも、続けて2人の友人にやめろと言われて、前期の化学療法が終わったあとで体調がよくなってからは4カ月吸っていない。折りに触れて、

吸いたいなあ……

と思うがなんとかこらえている。たぶん慣れれば平気になるだろう。これで肺がんの可能性は多少減る。

化学療法の効果は、驚くことに、わずか30%程度だという。がんの手術のあとで化学療法を受けた100人と受けなかった100人を比べると、を受けたグループの中でがんが再発したのは、受けなかったグループより30人だけ少なかったということである。ほんとうか、と言いたくなるが、がんの治療薬を開発している人間が言うのだから確かだろう。ゲンナリしていると、それでも他の治療法に比べれば高いのだと言う。

そこへ、その夫がある日何やら英語の文献を持って帰ってふんふんと読んでおいて、おい、毎日茶を10杯飲め、化学療法後の再発予防に効果があるそうだと、言う。埼玉大学かどこかの研究だった。

「へ？ 茶って緑茶？ 紅茶じゃダメなの？ コーヒーは？」

「紅茶は効かない。コーヒーは害にしかない」

「ほうじ茶は？ 麦茶は？」

「わかっているのは緑茶だけ」

「1日10杯を毎日飲めって言うの？ ちょっとできそうにはないわねえ」

「でも副作用はないよ。トイレに行く回数が増えるくらいかね」

「はあ。確かに副作用がないってのはいいわねえ。で、どのくらい効くの？」

「この資料によると30%」

「え。化学療法と同じくらい効くの？ これは……試してみる価値があるわねえ」

「だろ」

「ねえ、でも化学療法で30%、お茶で30%、合わせて60%効くっていうわけにはいかないでしょ」

「60%にはならない。けど、何%か増えるのは確実だよ。だいたい先進国の中で、日本だけが例外的に乳がんが少ないんだよ」

「そりゃあんだ、日本以外はみな白人国家でしょ、そのうえ食生活から家から何から習慣がみな違うんだから、同じにはいかないわよ」

「でもね、日本でも最近増えてるのは食生活の欧米化だと言われてるだろう。だからイタリアに来なかったら、あんたもがんにならなかったかもしれないんだけどね。ま、いまさら言ってもしょうがない」

「あら、あんたもそれを考えた？ わたしもよ。でも日本にいたからってがんにならなかったとは言えないし、交通事故でもう死んでたかもしれない。それにイタリアは充分楽しかった。起こったことはもう変えられないわ」

できるのは運命を受け入れることだけである。そしてその中で楽しむこと。わがままなようだが、夫も、「病は気からと言うが、反対に生きたい、という欲望が強ければ体力も増すはずだ」と楽しむことには肯定的である。病気のことばかり考えてクヨクヨしてたって、ロクなことはない。

スキーにも2度行った。

後期の化学療法中で、ずいぶん体調がよくなったがまだ完全ではないというころ、さすがに例年並みにはいかず、滑ったのはふだんの3分の1ほどだろうか。途中でああもうダメだ、くたびれた、と思うとそこで座って休む。それで

もだるさが抜けないうきにはスキー板をはずし、雪の中で寝っころがって暫く（しばらく）休む。そしてまた起き上がって滑るのだが、スキー場で寝ているひとはそういない。大丈夫？ と英語がそうっと頭の上から降ってきたこともある。眼を開けて、ええ大丈夫、ありがとう、疲れたから休んでるだけ、と笑顔で答える。

泊りがけで行ったときには、さすがに半日は宿で横になったり、新聞を読んだりしていた。それくらいなら行かなきゃいいのに、というのが多くの日本人だろうが、スキーの魅力の半分は滑る楽しさで、もう半分は雪山の美しさである。わたしがスキーを始めたのはイタリアに来てから、つまり40歳過ぎてからで、今やスキー板を八の字から平行にしようと努力しているまっ最中だ。滑る、という動作は、ふだんの摩擦に満ちた生活ではありえないか、たまにあっても危険である。直後に痛い尻餅（しりもち）が待っている。それが雪の上では楽しい。快感である。

それに加えてアルプスの美しさ。標高1千メートル、2千メートルと高くなると森林限界を超え、周りには樹木の1本もない岩山が灰色にそそり立つ。角度は45度を越しているのではないか。器具のない人間にはどうてい登れまい。日本ではあまり見たことのない、硬い、厳しい、断崖絶壁である。

そしてゲレンデー面の雪の白。高山特有の空の青。いつも夕方になって降りるたび、ああ下界には戻りたくないなと思う。

このときは、ついでに小さいころからの憧れの消えない城をふたつ見た。フランスから何度も攻めて来たり行ったりしたというアオスタ谷（ヴァルダオスタ州）には100を超す城が残っており、中世の香りが漂う。谷に沿って高速道路を通るたび、城や要塞がひとつ、またひとつと小高い岡の上に見えて、敵が来たとの狼煙（のろし）の知らせが次々と本城に送られるさまを彷彿（ほうふつ）とさせた。

なかでもヴェレスの城は実用一点張りの要塞型で、四角い影が夕焼けの空に黒々と浮かび上がる。ぜひ一度行ってみたいものだと以前から興味をそそられていた。

ガイドつきで初めて入ってみて、中が暗いのに驚いた。14世紀の技術で頑丈な石造りを選び、外からの攻撃に弱い窓を減らした結果だろう。装飾ひとつない殺風景な大壁、雨水を飲用に貯える仕組み、井戸、狭そうな兵隊用の寝室、食堂、と戦時の不自由な生活がしのばれた。そういえばイタリア語で2段ベッドは「城のベッド」という言い方をする。なぜなのか不思議だったが、王女様用ではなく、兵隊用だったらしい。

そこで、別の、もう少し広い山城を見たときのことを思い出した。大きめの部屋の壁際に、座るのにちょうどいいくらいの高さと奥行きのでっぱりが3メートルかそこら続いていた。窓はないが出窓のような感じである。その、床と平行な面のところどころに丸い板が置いてあって、持ち上げてみると穴が開いていた。はて、と覗（のぞ）いてみると下は崖で、かなり遠くに緑の草が見える。

「何、これ？」と聞いてみると、なんと、トイレだという。兵隊が壁を背にしてズボンを下げて穴の上に座り、排泄物を城の外に出すわけだ。汲み取りの手間が要らない。とはいえ、尻は寒くなかったろうか。わたしが子どもころはポットトイレがあたりまえで、冬の夜に腹をこわして長時間しゃがんでいると、足は疲れるわ、時折下から吹き上げてくる寒風に股は冷えきるわ、でたまらなかったことを思い出す。それに比べれば、こっちのほうが外気にさらされる領域は小さいけれど。そしてここでは何で尻を拭いていたのだろう？ 紙は貴重品だったはずだから、干し草かな。

それに、トイレが個室でないのが不思議だ。他人から見えるところで用を足していたわけ？ そういえば、レマルクの『西部戦線異状なし』でも、戦争状態でないときに何人か若い兵隊が便座を外に持ち出し、野原で気持ちよく用を足す、というシーンがあったような気がする。そのときも、仲間内とはいえ若い男というのは平気で人前に尻その他を出すのか、「連れション」ということばがあるくらいだから男は平気なのだろうか、と女子高に通っていたわたしはずいぶん不思議に思った記憶がある。

城のガイドに「日本ではある時期から人間の糞尿を肥料として使っていたが」

と尋ねると、珍しくいやな顔をして「ヨーロッパには家畜がたくさんいたから、その糞だけで充分だった。人間のは使わない」と言われた。なるほど。

さて、もうひとつは対照的に、妃のための別荘として建てたという豪勢居住型のグレッソネイの城を選んだ。とんがり屋根の塔がついた小宮殿で、子どものころ読んだ童話の舞台さながらである。しかし格子天井や華やかな壁布はわたしには装飾過剰だし、煮炊きの匂いを嫌って別棟に立てさせた厨房から地下通路で食事を運ばせたというエピソードからは、いかにも冷え切つてまずそうな食事が想像され、庶民の理解を超えていた。

楽しかったのはいいが、疲れたせいだろう、膣炎が再発した。尿道口も排尿が終わるときに痛痒（いたがゆ）い。普通なら、錠剤を毎晩膣の中に入れて2、3日で痒みがとれるのだが、今回はとれない。おまけに、今までなら外側が痒かったのに、今回は中が痒い。おそろしく痒い。とても人前ではかけない場所である。どこか痛いのもいけないが、痒いのもいいものではない。1日中痒いのを我慢するのもけっこうくたびれる。

薬局で相談すると、なじみになった店長が説明してくれた。

「化学療法で抵抗力が落ちるからね、口の中が乾くのと一緒に膣の粘膜も乾きやすくなるのよ。でもこのカンジダという菌は、大腸菌がおなかの中にもいるのと同じように、いつも体内にいる菌なのよ。ただ体力が落ちると異常繁殖して痒くなるのね。口の中に出ることもあるのよ」

口の中の粘膜が猛烈に痒くなるなんて、まるでぞつとしない。

普通の薬がだめなら、薬草系の石鹼で洗ってみましょうか、と店長が言う。膣の中も洗うのか、と尋ねるとそうだと答える。少々抵抗があったが、ビデというものがある国である。効果があるものなら、と試してみたが、まったく効かなかった。困り果て、そうだ、がんセンターの医者にご相談する手があった、と行って泣きついてみると、産婦人科の医者にかかれと言われた。無理押しで翌日の予約をとってもらい、行ってみると、錠剤が溶けているので粘膜の様子に正確にわからないがおそらくカンジダであろう、と別の薬を処方してくれた。

錠剤と、中を洗う液状の薬、そしてのみ薬までであった。外から効かないのなら体内から治すしかない。こののみ薬、1週間に1錠、という不思議な処方で、2錠で2千円という高い薬である。

薬といえば、38度以上の熱が出たら、赤血球の数が多いときであれば通常の解熱剤と一緒にこれをのめ、と指定された薬は、アメリカのテロで炭そ菌騒ぎがあったときの薬と同じ代物だと夫が笑った。かなりの種類の感染症に効く強力な薬だったのだ。化学療法ではどうしても免疫機能が大幅に低下する。熱が出てもただの風邪や流感で終わればいいが、肺炎だのなんだの併発したら厄介だから、それを防ぐためである。

この冬のインフルエンザは強力で、例によって4人の子どもたちが次々に罹（かか）り、最後に夫もやられた。年末のことである。8度5分の熱が5日続くという惨状だったが、半病人のわたしが病人の世話を焼くのはまことに行き届かず、夫もそれがわかっているから、ふだんほどには騒がなかった。今までなら彼は「高熱は発汗で冷ます」という信奉の持ち主で、いつも日に4、5回もわたしを呼んでは、汗びっしょりの下着から寝間着まで着替えていた。

その話をあとになってイタリア語学校ですると、

「だけどさあ、おんなじ熱出したって、子どもと亭主とじゃあえらい違いだよねえ」と遠慮のない調子でスウェーデン人が愚痴る。ほかの生徒がどっと笑うのをなんのことかと聞いていると、彼女は続けて

「子どもは熱があったって遊んでるけど……」と言うからわけがわかった。

「亭主ときた日にゃ『もう俺は死ぬう』でしょ？」とわたしがあとを続ける

と

「それぞれ！」

女房連中がいっせいに笑い、先生は唯一の男性生徒に気をつかった。その彼はアメリカインディアンの末裔（まつえい）であるが、反駁（はんぱく）しなかったところを見ると、ご同類らしい。

要は泣き言を言えば「よしよし」と甘やかしてくれるひとがいるかどうかの問題で、女房連中は普通自分で着替えをしたり粥をたいたりしなければしかた

がないから、しょうもない泣き言はくらないだけの話であるが、同じことを南アフリカ人もこぼしていたから、西洋でも東洋でも男には甘えん坊が多いらしい。

インフルエンザは、夫の熱がひいた日の晩からわたしにうつった。一家全滅は結婚以来初めてである。今までなら、自分に熱があるのにぐずる子どもの面倒なんかみるのはたまらない、と思っていたせいか一緒に寝込んだことはなかったのだが、さすがに体力が落ちてはかなわなかった。熱が出ると、きつい。それこそ「もう死ぬんじゃないだろうか」と思う。

台所へ下りてみると亭主殿がかたづけをしてくれているが、わたしがあとで食べようと思っていた残り物は捨ててあるし、休みというのに子どもたちは宿題もせずに1日ぐうたら遊んでばかりいる。病人特有の癩（かん）をたてたわたしがつけつけと文句を言いたてると、病みあがりの身をおしてなんとか動いている哀れな亭主殿は、これでも一生懸命やってるんだよ、とため息をつく。

「おまえが歳をとったら、さぞかし口やかましい婆さんになることだろうな」
運よく婆さんになれるのは、この先がんで死ななかったときだけだと言い返しかけたが、さすがに口から出さずに呑みこんだ。

化学療法の予約があった水曜日、まだ37度の熱があったが予定を遅らせたくなかったので行ってみると、熱があってはだめだと月曜日に延期になった。その月曜日も、白血球の数が少な過ぎると若い医者が2人頭を寄せて何事か相談している。化学療法の常で、白血球の数はとうから標準値を下回っているが、この日は、これ以上下がったら治療が続けられないところまで来ていたのだ。

「今日はなんとかできるけど、来週もっと下がったら困るから、白血球を増やす薬を注射しましょう。自分でやったことある？」

「ないけど、やりかたを教えてくれたらやるわ。でもどうして今日ここでできないの？」

「今日はどうせ化学療法で白血球が死ぬから無駄なのよ。土曜日ぐらいになったら回復するから、そのとき注射すれば次の月曜日には白血球が増える」

というわけで、看護師に皮下注射のやりかたを教わった。薬の種類によって、筋肉注射がいいのと皮下注射がいいのがあるらしい。筋肉注射なら、吐いていたころすでにやりかたを教わっている。嘔吐止めの薬は口からのむより注射したほうが早く効くから自分でやれ、と言われたのだ。

まず手をきれいに洗い、アルコールと綿花を用意する。掃除用に買った工業用アルコールでもいいかと尋ねるとかまわないと言う。綿花は化粧用の拭きとり綿でもティッシュでもいいそうだ。パンツをおろして尻の上のあたりを出し、なんだかよくわからないが長方形の3辺を描くようにして位置を決め、アルコールで皮膚を消毒する。注射器の針の蓋をはずし、薬液のアンプルびんの首をへし折る。昭和レトロの子どもころ、近所の医院で見ていた風景である。液を注射器に吸い込む。そして、針を皮膚に直角に深く突き刺す。ここが肝要で、脂肪層ではダメ、筋肉層に入らなければいけないので、5センチ近くある針の根元まで一気に突き刺せと言う。ゆっくりやるより痛くないと。もし血液が注射器に逆流してきたら、針が血管に入ったということでよくないから、1度抜いて刺し替えるべし。で、ゆっくりとピストンを押して、ハイおしまい。あとはもう一度アルコールで拭くだけ。

フムフムこれならできそうだと、全部ノートに手順を書き留めておいて、帰って亭主にとくとくと話して聞かせると、彼は露骨に顔をしかめた。

「いびせえ」

山口県東部の方言で、可哀そうだとか、気味悪いとかいう意味である。

「どっちよ」

「気味悪いほう」

「何よ、あんたがやるんじゃないじゃない。わたしが自分にやるんだからいいじゃないのさ」

「よくやるね」

「簡単よ。なんてことないわ」

「俺はイヤだ」

元々いい歳をして注射が大嫌いなのだ。この「針恐怖症」は洋の東西を通じ

てなぜか圧倒的に男に多いらしい。

日本で注射が医者だけに許されているのは、麻薬、覚醒剤の乱用を防ぐためだというのが、欧米では別に禁止されてはいない。かといって、誰もが平気でやるわけではないらしい。シルヴィアは「やあだ、わたし絶対看護師の友だちのところへ行ってやってもらう」と断言したし、音楽をやっている友人の話では、歌の先生のところで先生の具合が急に悪くなって、さあ備えつけの薬を注射しなくちゃ、ということがあったそうなの。先生は高齢で、これも高齢の御主人があたふたと近所の獣医を呼びに行った。御主人には注射をする自信がなく、あのひとは注射がうまいから、ということだったらしいが、友人は「なんで獣医なんだろう？ 先生はえらく太っているのだから人間の医者より獣医のほうがいいんだろうか？」と内心疑問に思ったと笑っていた。まさかね。

今回の皮下注射はもっと簡単である。「皮下」というのは脂肪層の中ということで、腹の皮をつまんでおいて、そこへ皮膚と平行にちょっと針を刺す。腹なら4人出産したあとで十分に皮はたるんでいるし、脂肪に不足はない。だいたい身体（からだ）の前だから、尻よりよっぽどやりやすい。

おもしろかった、と喜んでいるわたしは、やっぱり好奇心が人並外れているのだろう。英語には「好奇心は猫をも殺す」(Curiosity can kill a cat.) という諺（ことわざ）があって、口に出してみると（キュリオシティ キャン キル ア キャット）とkの音を単語ごとに重ねるという洒落（しゃれ）っ気が備わっている。わたしはこの諺を地で行く手合いである。つまり、旺盛過ぎる好奇心にトラブルはつきもの。

うーん、いろいろ思い当たるなあ。

ちょうど年が明けたころから、髪の毛がまた生えてきた。化学療法の前期のきつい薬が終わったのは11月6日なので、副作用が抜けるのにざっとふた月かかったわけだ。12月中は、帽子をかぶっていないと頭が寒かった。特に何気なしに外に出ると、冷気がまともに頭皮にしみた。夜も寒いので、かつら屋さんがくれた薄いぴったりした帽子をかぶって寝たこともある。

2月に入って頭全体を1センチほどの髪が覆うと、タンクトップを着たくらいの温かさだった。3月になってもう1センチ伸びると、Tシャツを1枚着たくらい。そしてその後はセーター1枚くらい温かくなった。

化学療法のあとでは髪の質が変わることがあると聞いていたが、確かに前よりずっと柔らかい。先を切っていないせいもあるだろう。赤ん坊の頭のようなものである。自分で自分の頭を撫でて、ひどく触（さわ）り心地がいい。ほら、触ってごらん、と友だちにも強制する。でも、見かけはなんだか男臭くなったようで、ツルツパゲのほうが色っぽかったような気がする。

といって、まさかもう一度剃ろうとは思わないが。初めて寝癖がついたときは、めんどろと思うよりも、よくぞ髪がここまで伸びてくれたとずいぶん嬉しかった。

そして、ハゲになる前には目についていた白髪が、すっかりなくなっている。それまで白髪を気にしたことはなかったのだが、まあ白髪がなくなっても、文句は言う気にはなれない。化学療法にはそんな影響もあるのね、というくらいだ。

眉毛は、何本、と数えられるほどまで抜けて、人相がすっかり悪くなっていた。眉がこれほど顔の印象に響くとは思わなかった。生まれて初めて化粧用の鉛筆を買って描いてみる。難しい。右左がそろわないどころではなく、きれいな曲線にならない。鏡を睨（にら）んで描いては消し、消しては描いてを繰り返す。慣れの問題なのだろうが、きれいな眉が描けるといのはひとつの能力だとしみじみ思った。

どういうわけか、からだ中の毛が抜けたあと、場所によって毛が新しく生えてくる度合いに差があった。ホルモンのせいだろうか。からだ中の毛というのはほんとにからだ中で、患者どうしでたまに笑いあうのだが、手足も、腋（わき）も、股もで、「髪の毛のことは聞いてたけど、アソコまでとはねえ」「ほんとよ、誰も言わないんだもの」「あら、わたし前からどうなるんだろって思ってた。言いにくいから言わないだけよね」てなもんである。しかし西洋人は手足がわりに毛深く夏は脱毛をするひとが多いので、手間が省けていい、とあるイ

ギリス人は喜んでいた。

もっと手間が省けていいのは頭を洗うときである。顔を洗うのと一緒に石鹸をぬって流せばそれでおしまい、タオルで拭けば2秒で乾く。ドライヤーも要らなければ、朝鏡を見てアラやだ、このボサボサ、ということもない。これは一番の利点だった。ちょっとはいいことがなけりゃね、とこれも患者同士で笑うことである。

かつらは面倒なので、3月くらいから暖かい日は坊主頭で出かけることにした。幸い、女の短髪、坊主頭はここのところイタリアでは流行らしくときどき見かける。わたしにとっても似合っている、とまでは思えないが、ぎょっとしたようにわたしの顔を見たひとは2人しかいなかったの、澄まして歩いている。

ただ、体力が回復せず、やたらと風邪をひくのには閉口した。家の暖房を高めにしているのだが、ちょっと足元が冷えると、背中に寒気がする。計っても熱はないのだが、熱っぽい感じがしてからだがる。週に3日はこの調子で、外出を半分以上とりやめて寝床でぬくぬくしている。それでも、去年のあのどうしようもないほどのしんどさから比べると天国のようだ。それから化学療法の後遺症で抵抗力が落ちているのだからしょうがないのだが、膣炎も尿道口炎も治らない。毎日トイレに行くたび薬を使うのは鬱陶（うっとう）しい。医者は、「しょうがないわね、ずっと薬を続けなさい」と言うだけである。治るまで結局は3月いっぱいかった。

そして、この闘病中ずっと、レストランに行きたいとはついに思わなかった。以前なら「イタリア料理のおいしいの、今まで食べたことのないのが食べたい！」と、亭主や子どもの食べるものを用意しておいてでも、ひとり国際クラブの外食会に行ったものだが、最近はまるで食指が動かない。自分のつくる日本料理のほうがいい。からだの調子が悪いときはやはり食べ慣れたものに限るのだと痛感した。

体調がしゃんとしないあいだ、子どもたちが手伝いをしてくれると助かる。とはいえ、手伝いをさせるのにもおだてたり叱ったり馬力の要ることで、自分

がやるほうが早い、ということも多かったが。10歳の息子は、何日か米をといでくれた。1週間ほど続けたところで、「ええーっ、またぼくう？」とわめく。そこへ8歳の娘が「わたしやる！」。

これ幸いと2階の寝床から、お米は6杯すりきりよ、と指示したまではよかった。

が、「母さん、お釜にご飯が残ってる」と階段の下から娘が言う。

「え、どのくらい？」

「少し」

「じゃいいわよ。そのままお米といでちょうだい」

わたしはひどい無精で、残っている冷やご飯が2粒3粒くらいなら、釜を洗わずにそのまま次の米をとぐ。きれい好き、いやフツのひとでものけぞりかねないやり方だろうが、わたしに言わせれば、冷やご飯も生米（なまごめ）も米に変わりはなく、炊いてしまえばさして違いはわからない。高温で消毒もされる。

しかし、あとでわかったのだが、娘が「少し」と判断した量は茶碗2杯分ほどで、わたしなら「多い」と考える量だった。

娘は母の指示に忠実に従って、その大量の冷やご飯の上に生米を6合入れ、水を入れてといだ。帰ってきた亭主がスイッチを入れる前の炊飯器の蓋を開け、生米にふやけたご飯が混じっているさまに一瞬目を疑い、次の瞬間2階まで聞こえる叫び声をあげた。

1月、多少体調が戻りかけたか、というころ、半年吹かなかったオーボエを試してみた。話にならない。楽器を吹くという作業は肺も心臓もまともでないと、とうていできることではない。元気だったころでさえ、息が続かず目の前が真っ白になるのはしょっちゅうだった。

何か別の音楽が要る。

ラジオはイタリアだけあって、一日中クラシックだけを流す、それも作曲者と演奏者を告げるだけでほかの能書きを言わない局があり、別にCDもあるけ

れども、聞くだけでなく、自分でやりたい。

ふと、娘2人が弾いているピアノはどうだろうかと思った。わたしが習っていたのは30年以上前で、初歩のバイエルが終わってやめた口だが、暇だけはふんだんにある今、時間さえかければなんとか弾けるようになるのではないか。ピアノの音自体はあまり好きではないが、この際ぜいたくは言えない。

バッハが弾きたい。

家に来てくれる娘の先生に頼むと、呆れ顔ではあったが、指導を引き受けてくれた。

とはいえ、当然指は動かない。先生は速く弾くな、ゆっくり、もっとゆっくり、と言う。1音1音強さがまちまちで、強く弾くとボロがでるから弱く弾け、と。そしてわたしは楽譜を読み慣れていないから、両手で初めて弾くと、1曲終わるのに30分かかる。先生が小学校の高学年で弾いていた曲だそうで、わたしには実は程度が高過ぎる。先生が融通のきくひとだから引き受けてくれたのだろう。

それでも、このインヴェンションという、ヨハン・セバスチアン・バッハが自分の9人の子の中で長男にピアノを教えるために作曲したシリーズは、たとえばようもなくきれいなのである。よくあるような右手が旋律で左手が伴奏という形式ではなく、右手のメロディがきれいで左手のメロディもきれい、両方一緒に弾くともっときれい、という素人（しろうと）には思いつきもしない「二声」とか「対位法」とか呼ばれる形式なのだが、弾いていると、へたでもつつかえつつかえでも、心がやすらぐ。おぼつかないピアノの音と一緒に、自分の心も共振している感じがある。

やめられない。

癒（いや）される。

どうかすると日に3時間ほども弾いている。うまいことにオーボエと違って、いくら弾いても疲れな。ヒーリングとか癒しの音楽とかいう言い方を聞くことがあるが、わたしにはバッハこそがそれであった。

去年わたしが国際クラブでやっていたお出かけ行事係を、今年はマルティンがやっている。冬のさなかに、彼女はダ・ヴィンチの「最後の晚餐」鑑賞を組んだ。世界的な名画である。何年か修復のため見られなかった壁画が、今年から予約人数限定で見られる。

わたしは実は、見に行く気がなかった。有名過ぎるからである。日本人のミラノツアーならまずまちがいなく入っているのではないか。こういうのをヘソ曲がりと言うのだろう。が、あと1年でたぶん帰国、という予定が見えてくると、マルティンが「マドカのためにこの絵を選んだのよ」と誘ってくれていることだし、ま、行ってみるか、という気になってきた。

行ってみて、実によかった。

修道院のただっ広い1室の白壁の上のほうに、キリストが13人の弟子に囲まれて食卓についている絵が、直接描かれている。イタリア訛（なま）りのきつい英語のガイドの説明を聞き、近くからイエスの顔をじっと眺めると、そこには自分の死が近いことをあきらかに知る哀しさと、苦悩の末に受け入れたと見える諦め、そして弟子が自分を裏切ることを確信し、しかもそれを赦（ゆる）している慈悲の心が充ちている。

イエスよ、どうやってあなたは自分の死を受け容れたのか。わたしは彼に問うた。わたしはいやだ。あなたの顔は、あなたが死を承諾していることを示している。どうして死ぬことを納得できるのか。死んだらおしまいではないか。そのうえ、あなたは弟子としてあなたが教え信頼したひとが、あなたを裏切り、あなたを死なせることを、はっきり知っている。なぜそれが赦せるのか。

聖書によれば、イエスは神の子でありながら人間のからだと心を持った、いわば矛盾した存在である。また、人類を救うという父である神の意思を全うするために、すすんで十字架にかかったという、「ありえない」ほどの犠牲精神に満ちたひとでもあった。しかし、そこに苦しみがなかったわけではない。

その苦しみ、哀しみと諦め、愛と赦しを、わたしはひしひしと感じた。がんにかかり「死」が身近なものになったわたしにとって、死を前にしたイエスの表情は他人事とは思えず、しかも、「救世主」として、ただの人間を超えた崇高

な「愛と赦し」を感じさせる。わたしは涙をこらえた。

何歩か後ろに下がって壁画全体を眺めると、美術の教科書で遠近法のお手本として示される、遠くのある1点に視点が収斂（しゅうれん）していき、奥行きを感じさせる見事な遠近法である。またイエスのすぐそばの弟子は、どう見ても長髪の優しげな女性にしか見えない。裏切り者を刺し殺そうと短剣を持っている弟子、腕が異様に長く見える弟子、どれがユダなのだろうか、どれがペテロとかヨハネとかという弟子なのだろうか、と制限時間いっぱい見ても飽きず、さすが世界に誇る名画であった。

化学療法の終わりに、もう一度レントゲン写真をとった。腫瘍は、まったく小さくなっていなかった。しかたがない。レントゲン科の医者は、周囲は変わらなくても厚みが減ったかもしれないし、そうでなくても、中は空洞ができているのかもしれないね、と言うが、わたしには同じことである。手術は「右乳房とわきの下のリンパ節全摘出」そして「乳房再建」となる。

今まで化学療法は腫瘍科医の担当だったが、手術は外科医が担当で、その外科医が来て説明をする。以前ひとに聞いたときには、乳房の中は全部取っても、皮膚は多少たるませて残しておくような話だったが、今日面と向かって尋ねてみると、中を全部取り去るのは同じだが、乳首を含め、眼の格好というかアーモンド型に皮膚を取り去り、両端を縫い合わせると言う。そして乳房を取った同じ日に引き続いて、大胸筋の下に袋を入れ、中に生理食塩水を入れる。この生理食塩水の量をしだいに増やして行ってふくらみをつくり、皮膚を伸ばす。9カ月後、落ち着いたところで袋をシリコンと入れ替える。

乳首は？ と尋ねると、彼は紙の端をちよいとちぎってしわを寄せてみせ、

「あとでこうやって縫い縮めるんだよ」

「色は？」

「そのあとでつけるよ」

「入れ墨みたいに？」

「そのとおり」

「日本じゃ色が似ている股の皮膚を使うなんて読んだこともあるけど」

「ああ、昔はね。今はそんなことはしない」

ふうん、とうなずいておいて、わたしはかねてからの疑問を晴らすことにした。

「ねえ、先生。歳をとるとお乳は自然に小さくなってブランブランするようになるでしょ？」

垂れる、と言いたかったのだがイタリア語でなんと言うかわからなかったから、わたしは「振り子のように揺れる」という意味のことばを使っていた。奥のほうをチラリと見ると、うつむいた腫瘍科の若い女医の顔が真っ赤になっている。声を殺して笑っているのだ。

「でも人工のお乳はいつまでたってもブランブランしないわよね？」

「するとシニョーラ（奥さん）、なにかね？」

髭（ひげ）をはやした中年の外科医は、くりくりした眼をわたしの顔にじっと据えた。まるで世界に10匹としない珍獣を見るような目つきである。

「片っぱの乳は上、もう1個は下、というのが気に入らんわけかね」

「そう。気に入くない」

「じゃもう一方にもシリコン入れりゃいい」

「へっ？」

何を好きこのんで健康な胸まで切り貼りしなければいけないか。女優志願ではあるまいし、40過ぎて豊胸手術をするなんて。

しかし、ここイタリアでわたしと同様に乳がんでオッパイを全摘、再建した日本人はほっそりしたひとだったが、形成外科医に、反対側の胸も大きくしましょ、ね、あなたをもっときれいにしてあげるから、と執拗に勧められ、とうとう最後にうん、と言ってしまい、もう一方にもシリコンを入れた。が、あとになって縫い目から水分が出てきた。あわてて医者に行ったら、拒否反応をおこしたんだね、と再手術になったそうなの。

めんどくさくなる可能性はある。

でも、「もっときれいになる」、ね。

ふむ。

しだいにわたしは、もう片方の乳房にもシリコンを入れて、左右のつりあいをとることを受け入れ始めた。だいたい乳房の再建を決意したのは、ひとえに自分のためである。パッドを入れればいいではないか、温泉でひとに見られるのがいやなのか、なにをいい歳をして、と怪訝（けげん）そうに尋ねられたこともあるが、人目はわたしには問題ではない。それよりも、風呂に入るたび、着替えをするたび、片方の乳房がない、というのは、たとえようもなくさびしいことに思われたのだ。

わたしは「おんな」である。おんなである、ということは、わたしの中の大切な部分である。それはイタリアではあたりまえだが、日本では必ずしもそうでない。司馬遼太郎か誰かも言っていたことだと思うが、儒教の影響であろう。儒教は、男女の愛情というものをまったく重視していない。親への孝行、自分が仕（つか）えるひとへの忠義、恩、そして友情とは少し違うようだが同等のひととの信頼関係は大切であるが、夫婦間の愛情は、特に価値があるとも美しいとも言わない。もちろん人情としてはあるわけだが、伝統的にはいわば下賤な感情として捕えられてはいないか。恋愛は町人の文化ではあっても、武士の文化ではなかった。おとことおんなのあいだは、尊いものだという扱いはない。したがって、男がおとこであり女がおんなであり続けることも、さほど重視されない。日本で昔から聞く、長年連れ添った夫婦は積極的に愛情を表すものではなく、互いに空気に近い、つまりなければ困るがあってあたりまえで、ふだんは意識しない存在に近づく、というのは、西洋人には理解のしにくい感情である。

服装からしても、着物はいわば隠す装いである。からだの丸みはあらわれるが肌は出さない。女らしさは隠された中からにじみ出るもので、さらけ出して強調するものではない。一方ヨーロッパの油絵を見ると、中世の貴婦人の肩や腕、首もとの肌を大きく出している肖像に驚く。既婚女性でもである。むしろ、未婚女性のほうが襟（えり）のつまった服を着るべきだという会話が、トルス

トイだかゾラだかの小説にあったような気がする。

女らしさに限らず、「にんげん」のからだの美しさを追求するのは、西洋ではギリシャ、ローマ以来の伝統で、これも東洋美術とは異なる。日本でヌードと言うと卑猥さや性的な側面が強いが、ヨーロッパでは堂々と、おおらかに、裸を誇る。ダビデやヘラクレスなど均整のとれた男性の大理石像のうつくしいこと。

美しいものは、うつくしい。

しかし中国以来の東洋の伝統では、男の肉体というのもそれほど大切なものではない。アメリカで文化人類学の講座をとったときに読んだ短い論文に、中国人の理想である「大人（たいじん）」の条件にスポーツができる、という要素はまったく含まれていない、武道の修練はあるが楽しむためのものではない、とあった。体力はいわば兵隊に必要なもので、知者には要らない、という考え方である。つまり、東洋では、肉体を軽視する傾向があるのではないか。そのうえに、極めてマジメな文化であるから、精神でいろんなことは克服できる、とくる。

けれど、西洋の文化になじんでみると、わたしたちはからだで生きているのだから、からだのことも大切に考えてやらなければいけない、という考え方は、わたしにはとても合理的で自然で楽だ。

そして日本は男社会であり、特にこの当時、若い女はちやほやするけれども、中年以上の女の女らしさはかなり無視されていた。しかし、日本女性本人が乳房を失うことへの抵抗感は、実際にはかなり強いものがあると思う。抵抗を覚えるほうが、自然なことではないか。少なくとも、「中年で乳房を失うなんて、たいしたことではないではないか」という他人からの声や、「こんなことを口にするのはとても恥ずかしくてできない」、「命が助かるのだから他のことは我慢するのがあたりまえだ」という本人のことばの陰に隠れている「ため息」はかなりあるという感じがする。

イタリアでそう言うと、ある医者は臆面もなく「では亭主を喜ばせるのは、日本では女にとって大事なことではないのか」と問うて、わたしはあまりの直

截さに目を白黒して返事もできなかった。この点に関しては、中年以上の夫婦間の性生活について何カ国かで調査されたとき、日本だけが際立って貧しかった、というのを2度見聞きした覚えがある。働き過ぎを含めた肉体的な原因か、文化的な習慣の問題なのかわからないが、あたりを見渡すとうなずける節がある。

もちろんイタリアでも、乳房を全摘しても再建はしない、と言うひとはいるし、かつて再建は普通には行われなかったのだが、乳房の喪失からくる心理的な問題が大きいことから、今では国民保険でまかなわれているのだ、と聞いた。わたしの二番目の同室患者も、「わたしは63歳よ。そんな大きいお乳でもない。でもわたしには大事なの」と断言していた。

さて、両方の乳房のつりあいをとって、ついでにもっと巨乳にしてもらおうかしら、と冗談めかして友だちに語ると、たいていは何の寝言を言っているかと呆れた眼でわたしを眺め、「健康が一番でしょ」と冷めた調子で言う。ところが、なかでひとりだけ、あら、それもいいんじゃないの？ と言ったのがいた。

アメリカ人のダーリンである。

「マドカ、あなたはずいぶん辛い目にあったわけでしょ。ここでちょっとだけ余計な手術をして、それであなたがいい気持ちになれるなら、それもいいじゃないの」

「補償みたいに考えるわけ？」

「そうよ」

なかなかいいことを言うではないか。辛い目にあったあとのご褒美、とは。

彼女はわたしが個人的に知っている中で、女優にもひけをとらない一番の美人である。それもジーパンよりも絹のブラウスのほうがよく似合う、派手で華やかなタイプの美人である。性格はきわめて優しく、すらりと背は高い。ゆるい巻き毛を肩までたらし、ほどよく肩幅と腰が張り、ウエストもほどよく細い。ところが胸だけはペタンコ。

「ははあ」とこのときわたしは深く納得した。

あの別嬪（べっぴん）にも胸がないというコンプレックスがあったか。

彼女もインテリだから、知性が邪魔をして豊胸手術などという「愚かな」真似はできなかつたに違いないが、この手の肉体にかかわるコンプレックスは、ふだんは自分には他の魅力があると言い聞かせ、気にしなくなっているにしても、実はけっこう根の深いことが珍しくない。チビだとか、足が太いとか、目が小さいとか。そういえばわたしは若いころからずっと、もっと胸が大きければいいのに、と願っていたことを思い出した。

なにせイタリアでは無料（タダ）である。

よし。決定。左の乳房も大きくしてもらおう。わたしは「愚かな」人間として「愚かな」豊胸手術をすることを決心した。